

社会に開かれた教育課程の充実

～地域と共に育ち、地域に感謝される学校づくりの推進～

秋田県立比内支援学校 校長 鎌田 裕之

I 本校の概要と学校経営方針

本校は、秋田県北部の大館市に在り、昭和49（1974）年に開校（寄宿舎併設）し、創立49年目となり、県立の知的障害を主な対象とする特別支援学校では、秋田県で一番の歴史があります。小学部、中学部、高等部（普通科）があり、児童生徒125名が在籍しています。本校の特色は、広大な農場を有した教育環境、創立以来の理解ある地域、校舎改築による新校舎を活かした教育活動の推進と考えています。開校以来、自立と社会参加を教育目標に、学校の特色を活かした職業教育に力を入れてきました。結果、近年は高等部卒業生5～6割の一般就労と高い就職率を維持することができています。

今年度の学校経営方針の重点事項（抜粋）は次のとおりです。

1 地域と共に育ち、地域に感謝される学校づくりの推進

- ・恵まれた自然環境や開校当時からの理解ある地域との関係を活かした教育課程を編成し、児童生徒の実態に即した特色ある教育活動を展開する。
- ・地域を題材とした学習に積極的に取り組み、学校と地域が共に育つ活動の実践や地域から感謝される体験を通して、児童生徒の「本物の力」を育てる。

2 子どもの思いや願いに応える教育活動の展開

- ・体験的、実地的な学習を創意・工夫し、常にチャレンジある学習活動を展開する。
- ・希望する進路の実現を目指し、早期からの働く力の育成を含めた実践的職業教育の充実を図る。

以上の学校経営を踏まえ、教育課程を編成していますが、特に、地域と関わる作業学習と生活単元学習を教育課程の中核と位置付けています。地域と関わる学習により、児童生徒が本物の体験をし、卒業後、実社会で生きる力の育成を目指しています。

II 地域と共にある活動の実践

本校の一番の重点である地域と共にある教育活動、そして教育課程の中核と位置付けている作業学習、生活単元学習の取組について紹介します。

1 作業学習

学校経営の重点を受け、高等部では、地域資源や新校舎の機能を最大限に活かした授業の展開と作業製品開発や質の向上を目指すことを重点としています。高等部には、農園芸、食品加工、木工、陶芸、縫製、総合サービスの各作業班があり、各班が共通して、地域との連携ということを作業製品を開発する上で基本としています。

地域との連携を示す具体の一つ目に、大館市の特産や地場産業との結び付きがあります。市で力を入れている枝豆の生産を学校の農場で行っており、「あきた香り五葉」という地域ブランドを生産している他、枝豆を使ったお菓子（枝豆フィナンシェ）作りに取り組んでいます。大館市が組織している「えだまめのまち大館連絡協議会」にも加盟しています。

また、市の伝統工芸品である曲げわっぱの技法を取り入れ、「わっぱコースター」や「わっぱ皿」

の製作をしているほか、市からの受託を受けての「秋田杉コースター」の製作、間伐した杉の葉の提供を受けて、杉の葉を染料とした染め物や焼灰を釉薬とした陶芸製品に取り組んでいます。

さらに、地域にはバラ園（小倉バラ園、石田ローズガーデン）があることから、地域の貴重な特産（名所）を、学校として継承していくことを主なねらいとして、バラ園の経営者からの指導を受けながら、バラの栽培（学校バラ園）に取り組んでおり、現在、約50種類のバラを植栽しています。

具体の二つ目として、地域の人材（専門家）の活用があります。JA営農指導員からの野菜栽培の指導、惣菜店の方からランチメニュー開発の指導、菓子職人からの農場での収穫物を使用したお菓子作りの指導の他、曲げわっぱ（伝統工芸士）、陶芸、草木染め、ビルクリーニング、喫茶等、それぞれの専門家からの指導を受け、本物の作業及び製品作りを目指しています。

本校の作業学習製品は、市ふるさと納税の返礼品（大館からの贈り物「わくわく彩 食卓セット」）に採用されています。また、市内2カ所の産直販売店舗で常設販売されているほか、市内のショッピングセンターと道の駅でそれぞれ年1回販売会を開催しています。製品の納入先や販売方法等を明確にすることで、作業への見通しや意欲と共に、正確さ等に留意した質の高い製品作りと真剣な作業への取組（意識、態度）をねらいとしています。

また、新校舎の改築基本構想の一つである地域と共にある学校、地域と繋がる授業実践として、地域の方を対象とした「達子森のものづくり講座」を開催しています。コロナ禍により、回数や受け入れ人数等の制限が必要なものの、木工「曲げわっぱコースター作り」、陶芸「稲藁釉薬を使った器作り」、縫製「杉や藍などを使った草木染め」の各講座を、生徒が講師となり実施しました。今年度は、市からの依頼があり、市民交流センターの陶芸教室で、生徒たちが講師となり受講者に皿作りを指導しました。地域の方との交流を深めるとともに、学習の成果を見てもらうことをねらいとしていますが、生徒たちにとっては、身に付けた技術を活かすとともに、教えることで自分たちの技術を改めて確認する機会となっています。

2 生活単元学習

各学部、各学年では、地域を題材にした生活単元学習に力を入れています。

小学部段階では、低学年の段階から学校周辺の施設等を見学する「地域探検」や地域の婦人会の方と交流し、郷土料理を学びながらの「おにぎり屋さん」の开店などに取り組んでいます。また、地域の小学校と交流し、秋祭りを共同で企画、準備し、実施しています。

中学部では、市教育委員会生涯学習課の事業である「木育」とタイアップし、木のおもちゃの製作、市民交流センターへの贈呈、木育フェスティバルでのワークショップ等に取り組みました。また、地域の商工会等が中心となった大館食の祭典協議会からの委託という形式で、きりたんぼPRグッズを製作し、贈呈しました。

高等部では、地域の各行事への参画を中核とした生活単元学習の年間計画を立てています。本場大館きりたんぼ祭りでのオリジナルの「カレーたんぼの店」の出店、大館大文字祭りの一環であるハチ公よさこい踊りでの「比内・絆・舞桜」チームでの出演、比内西のいちでの出店やステージイベントへの出演などは、地域と共にある学校としての必須の学習としています。ここ2年間、コロナ禍で各行事が中止になっていましたが、各学年では、参加に変わる形での地域参加、地域貢献の活動を考え、プロジェクト化した学習に取り組んでいます。昨年度は、高等部3年生が大館市からの依頼を受け、地域の公民館で「地域を元気にプロジェクト」に取り組みました。

ここで、今年度実践できた取組について紹介します。

（1）第13回達子森の夏祭り

近隣町内会等の実行委員会が主催者となり、本校を会場として、児童生徒と地域住民との交流を目的に例年開催している夏祭りです。地域の祭りとして定着してきており、コロナ禍もあり、飲食の出店は止めたものの、今年は3年ぶりに、ステージイベントを行いました。内容は、ステージとしてよさこい演舞、太鼓演奏等、地域婦人会との盆踊り、中学部作業学習製品販売、学習成果（達子森の歴史等）の発表、生徒が考案した出店、花火の打ち上げ等です。地域の祭りを盛り上げるために考え、準備し、発表するといった、まさに地域と共にというねらいを具現化できたと感じられる一日であり、児童生徒にとっても地域からの称賛が、児童生徒の自信、有能感につながり、改めて大事な実践であると認識しました。

（2）大館市民交流センターとの連携

中学部2年が、昨年度、木のおもちゃや車、家、段ボールを再利用した滑り台などを贈呈した市民交流センターから、施設ホールに季節を感じられる装飾を施してほしいとのリクエスト依頼を受け、卵パックを再利用した手作りの吹き流しや風鈴を贈呈しました。施設を利用する子どものために自分たちができることを考え、持続可能な開発目標（SDGs）の視点を取り入れて学習を進めました。交流センターからも地域のために協力して頑張ってくれたこと、来場した方が喜んでくれるという称賛をもらい、地域貢献を通して達成感を味わうことができました。

Ⅲ 成果と今後の方向性

本校は、特色である「農場」と「地域」というテーマに、早期からの職業教育（将来を意識した活動）と地域の中で、本物の活動による「本物の力」の育成に取り組んできています。

また、現在、校舎改築中であり、職業教育を特色ある教育活動として一層推進できる「新校舎」となりました。それらの本校としての特色を生かして児童生徒を育成していくという方向性、そして作業学習や生活単元学習をはじめとした各教科等を合わせた指導を重点としていくことを、職員で共有した推進ができています。成果は、より質の高い授業づくりであり、それを目指した授業改善の推進として現れると思われ、児童生徒の成長として検証すべきであろうと思います。

コロナ禍を機に、地域に出る活動については、それが児童生徒にとって本物の力の育成が図られる活動であるか、地域にとって本当に意義のある活動であるかを改めて確認して、見直しを図りました。地域活動で得られる地域からの称賛・承認、達成感・自信、自己有能感といったものが本校の児童生徒の実態や将来の自立を見据えた現段階の活動として有効であることも改めて確認することができました。これまで特別支援学校における地域活動は、どちらかという理解を押し進めることが主だったところから、学校が地域に貢献できることを推進する時代になってきたと感じています。そのためには、学校からの積極的な働きかけが必要であり、より地域社会での役割を担っていく実践が必要ではないかと思っています。

現在、地域のニーズを踏まえた活動が多くなってきています。地域の課題の理解や貢献の度合いについてはとても難しいことではありますが、それを意識し、探ること自体がとても大事なことだと考えます。コロナ禍で確認できた「その活動は、地域の活動としての役割があり、十分な成果をあげているか、子どもたちの自信、自己有能感を高める実践になっているか」という視点を大事にしながら、地域と共に育ち、地域に感謝される学校づくりの推進を図っていきたいと考えています。